田中

日本
験が語られ、「こういう言葉が出てくるようなになつたのは、かつてあった何かがなくなっ
かっかつたからなのではないか」という発言もあった。
味を見ていただせないかもしれません。でもかっかつてあった何かがなくなつたことで新たな
言葉が生じてくるのだとしたら、新たな言葉の中にそれがと無関係に存在するのはお
かしな話であろう。
「しつけと体罰の境界線を定めるのが難しい」という発言もあった。ここにもまた嘘
み合わない何かがあり、今の親たちの子育ての悩みを聞いていた時に相違する速和感
を覚えた。子育てについて話す場では必ず「どの程度まで許しているのか」「どこか
ら禁じていないのか」という線引きを求められたり、「どうやってしつけたいのか」
というその部分だけで取り出してノウハウを求められ戸惑う事が多い。そんなの答
えない。そこには学生たちと同じく、一般論で語れない自分がいる。自分の中で
はしつけとは、形や行為として外側から与えるものではないと考えている。人と人と
が一緒に生きていくためにどうしていったらよいかを、日々の生活の中で必然性を
持って感じ取っていく。そうすると、じゃあどうやってという一般的な方法論で片づけること
ができなくなる。
人権という言葉自体が個としての人間に備わっているものであり、また体罰という言葉は力関係のベクトルが一方に向いているものであり、親を対象を越えて見ることはないかも知れない。親を否定しているのではないかという考え。親を肯定するものでもない。個を尊重するということが関係性を断ち切ることとは違うはずだ。

母親たちと集う場で助けを求めている時には、その助けに難和感を感じることはあろう。たとえば、子どもが生まれたことで一度仕事に辞め、いずれまた仕事に復帰したいと考えながら迷っている母親がいる。自分の仕事の力が落ちていく不安にさいなまれて、一日でも早く仕事に復帰したいと考えている。それでも彼女の母親が仕事で忙しく、小さい頃に夜中に目覚めた時に隣に母親がいないときにちまちまと寂しい思いをしたとい

思い出せるだけでも額に引きずり込まれる思いがすると言って。仕事の疲れは気温と自分の子どもに同じ思いをさせたくない思いの間で葛藤しているという。自分がそうだったから必ず自分の子どももそうなる

子どもが生まれて仕事を辞めたものの、育てが辛い。でも人に任せることができ
ないと言す母親がいる。その講座の間、別室で子どもの保育をしていた、申し込んでいたにもかかわらず、居ても立ってもいられずに、彼女は保育室から子どもを連れてきて、結局ぐずる子どもを抱っこしながら立ったり座ったりして講座に参加していった。子ども連れ自体は私は全くかまわないのだが、抱っこしながながら「育児が辛くて、育児に関する本や心理学に関する本を沢山読んだ。自分がブレているからキツいのだ」ということは分かっている」と話す彼女の意識と行為に戸惑いを感じる。初めは親が専門的な知識を語ったり、頭の中で考えたことばを語ること自体に自分との関係性が見えていないことに違和感を感じるのだと思う。守るべき存在の私が違和感を感じるのは、自分は分身と感じてはいない。だから絵える必要もない、ということなのかかもしれないが、もうどちら自分自身のことを語っているのである。そのような場に集おうとする意志のある人は、意識が高くて語れる人々だからなのだろうか。また生活は、気がつくと今日は誰とも会話を交わしていない。一日だ。話したいという切実な思いもあるだろう。しかしそのような生活の中で自分自身にだけ意識が向いていては、いくら専門的な本を読んでも知識を身につけても、子どもたちのいる生活を楽しむことにはつながっていかないだろう。
吉本隆明と理学療法士の三好春樹が対談している『古い』の現在進行形』（春秋社、二〇〇〇年）という本の中に介護の世界の話が出てくるのが、その中でボランティアと人権意識への疑問が述べられている。ボランティアは心優しく、意識の高い人が多い。だいたい、大学出ている奥さんが、子育てが一段落してという人が多いのだ。人権意識を持っていた。「じいちゃん」とか「ばあちゃん」とか呼ぶ怒るのは言う。だから、自分をどう感じていいか、おばあさんがいるという。「あ、さん」と言葉で呼ばなくてはいけないと。言う状況判断能力が必要なのだ。三好氏は言う。ここではまだ、相手を客観的対象としてみて分析する近代的な方法論で周囲のみんなから客観的になかばみられた人間は普通かなわない、と述べられ、どうも大切なものがヒューマニズムとか人権とかいう言葉によってなくなってしまったと述べられている。前記の学生の言葉に通じるものだ。

またこの本の中で吉本氏は、人格と呼んだらいのか性格と呼んだらいのか、心というふうに呼んだらいのかわからない。それが、万葉時代から人を好きになってという部分は変わらないのではないか。つまり、そういう部分と、文明が発達して意識にもなく、大工さんの親方だった自分の親がよく出来ていると思ったエピソードを話
相手との関係性について三好氏は「痴呆性老人とかかわる時、心ここにあらずで、こうしていてはいけないとおもってやっていると絶対ダメです。目を合わせませ
んし、さっといなくなってしまう。けど心を落ち着けてちゃんとかわろうとし、
むしろ意図性を捨てて、本人の前で目を合わせて、そこで生じた雰囲気にじばんが動
かされていうふうにいていくときに、はじめて何か通じる。意図性を持ってこう
いうことをしてやろうとおもって、教科書に書いてあるとおりにやろうとしてもまっ
たくダメです。呆け老人はみごとに見ぬきません」と述べる。

介護の場は、今専門化が進め、意識の高い専門職の養成が進んでいる。子育てと非
常に似かよった状況にあるように思う。現代の子育ても意識的にこうすべきという所
からスタートしてや、子どもがどういう反応をするにせよ、それを買うことが横行
しています。しかし人権という言葉によって大切なものがなくなってしまったか、相手の様子
を見てかどうか状況に応じて、どういうことが機能しなくなったら、つまり相手との関
係の中で考えようとしないから、だから人権という言葉で身を守ることが必要になっ
てきているのか。どっちが先なのかは今の私にはわからない。また知識より無意識
の豊かさといってもどうやって無意識の豊かさをはぐくむことができるのであろうかと私
ははたと立ち止まってしまう。無意識の豊かさも「かつてあった何か」のひとつなのか
である。それとも万葉時代から変わらないものだろうか。
子どもを持つことによって初めて親は親となる。第一子の子育てで不安が大きいの
は、すべてが初めてだからだ。ある母親が言っていた。「一人目の子どもと一緒に親
は親として育っていくのだ」と。自分一人で悩みを抱え込まないように語ることも、
誰かが聞いてあげて自分を責めて深刻化しないようにすることも、必要な時に子ども
を預かってあげることも、必要な知識を教えてあげることも、時に具体的な
方法論も、その時々で必要になることがある。でもそれはノウハウとして一人歩きす
るのでは決してなく、それが集約していくところは、子どもとの関係の中にいる
自分を実感してほしいという願いなのだと思う。無意識の豊かさはその実感ととも
に現代の私たちの中に育まれるものだね。関係性を目覚めていくための手
助けをすることが今現在の私にとっての子育てを支援することであり、そのための機
みの織目目覚めさせてくれる子ども自身の存在でもある。